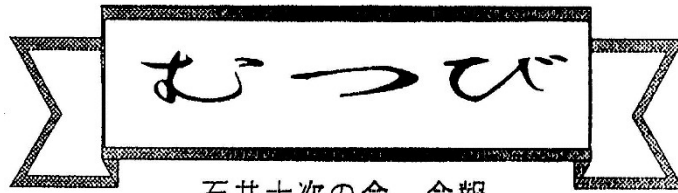


2021年
(令和3年)
2月10日



281号

何気ない日常を大切に

自立援助ホーム みなこホーム

管理者 丸目 和代

私の石井十次先生との出会いは、県外の短大で保育士の資格取得を目指していた学生の頃でした。通信教育でしたが勤労学生だった私は、会社が設けてくれている小さな学校で毎日2時間程の授業を受けておりました。養護原理という小さな教科書に、石井十次先生について記述されている箇所がありました。教科担当が、「宮崎県出身なら知っているだろう。知っておくべきだ。」と仰られましたが、恥ずかしながら十次先生のお名前も児童養護施設という言葉も存じ上げておらず、何も答えることができなかったことを覚えています。その後、友人が児童養護施設に実習に行くことになり、初めてどのような施設なのか知ることとなりました。就職活動では地元に戻ることを見据えて求人を探していた時、私が育った都城市にも児童養護施設があることを初めて知ったのです。帰省の際に有隣園を見学させていただき、その後資料館へ伺ったことを記憶しています。保育士として保育園ではなく児童養護施設で働いてみたいと思い、ご縁があり入社することとなりました。教科書で十次先生に出会わなければ、私は今こうして友愛社の一員として働いていなかったことでしょう。十次先生のお導きに感謝しております。

昨年5月、延岡市に自立援助ホーム「みなこホーム」を開設いたしました。友愛社の児童養護施設を退所し、奨学生として九州保健福祉大学で修学している学生や、県内の児童養護施設を退所した子ども等、現在男女6名が入居し共同生活を送っています。

平日はスタッフが食事を準備しますが、休日はアルバイトで収入を得ながら各自が生計を立て、家賃を支払い食材を買って自炊をしています。少しアドバイスすると、より美味しい食事が作れるようになり、自炊の楽しさを体感していることが伝わってくるようになりました。安くてお腹いっぱいになるメニューを考えるのも、子どもたちの楽しみになっているようです。

また、ホーム開設前より大学に通いアパートで生活している子どもたちも数名います。時々ホームの夕飯に誘って、近況を聞きながら元気な姿を見ることも支援の1つとなっています。

今年成人式を迎える子どもがいましたが、コロナ感染拡大の影響で、残念ながら成人式が中止となってしまいました。自分で振袖をレンタルできる店舗を探し、問い合わせで料金を確認し、日時調整をする…電話をしながら不安な表情でスタッフの方を見ることがありますが、しっかりと1人で予約をすることが出来ました。また中止に伴い、写真だけは残そうと日程変更をして、プロのカメラマンに撮ってもらいました。一生に一度のことですから、思い出に残ることでしょう。同じくアパート暮らしをしている子どもも成人式でしたが、コロナ禍で地元にも帰れずにいたため、一緒に気持ちばかりのお祝いをしたところです。

また、この1年はコロナ禍の影響でアルバイトのシフトが減少し、収入が激減してしまう子ども、飲食店でのアルバイトはコロナ感染リスクも高いため、帰宅後はすぐに入浴をさせたり、消毒液を持たせたりと、気が抜けない日々が続いています。

そのような日々の中、「今日はなに？いい匂いがする！」と、帰宅するとキッチンに駆け寄ってきて、スタッフとの何気ない会話が始まります。できる限り温かい食事を食卓に並べ、毎朝子どもたちの表情を確認し送り出す日々は、何気ない日常かもしれませんが18歳になっても20歳になっても大事なことであると感じています。子どもたちはアルバイトがあるため、毎日全員が顔をそろえて食事を摂ることは難しいですが、食卓を囲みながら1日の出来事を聞いたり、個別に相談を受けたりします。アルバイトから帰宅するのが23時という日もありますので、子どもたちの本音が聞ける時間は、夕食後から深夜になることも少なくはありません。学校やアルバイト、交友関係や恋愛相談…相談内容は様々ですが、愚痴を聞いてあげることも大事な時間であり、アドバイスをしたり励ましたりとして少しでも前を向けるような言葉をかけ不安なことを長引かせないように支援しています。

3月には2人が就職のために退去予定です(アパート暮らし1名も就職)。退去後も、「ただいま」と、気兼ねなく夕飯を食べに帰って来られる場所、存在であり続けられるよう、これからもスタッフ一同、子どもたちに温かく寄り添っていきます。

※コロナ禍での開設となりましたが、たくさんの方々のご支援があり、子どもたちは大学生活等を継続することが出来ております。この場をお借りして感謝申し上げます。

みなこホーム

〒882-0802 宮崎県延岡市野地町2丁目3925番地117

TEL:0982-20-4811 Mail:inako2020@yahoo.co.jp

高鍋藩校「明倫堂」

高鍋藩校明倫堂は第7代藩主、秋月種茂公（1743年江戸藩邸に生れる）によって創設された。

明倫とは、人間社会において人として、それぞれが、規律を守り、正しい行いを明らかにすることである。

【思想的背景】

1587年から280余年間、10代にわたって続いた高鍋藩は歴代の藩主が政治や教育に熱心に取り組み続けた。

なかでも、秋月種茂公は、「世の中が治まるには、規律を正しく優れた人材育成することが、第一である」とし学問所建設を重視した。



【秋月種茂公】

【明倫堂の内容】

教育課程は、大きく分けて行習齋（7・8歳小学課程）と著察齋（15・6歳から30歳まで大学課程）の2つである。

中心となったのは行習齋である。つまり小さい時からの躰（しつけ）を重視した。初めは家督をつぐ嫡子が中心であったが、ここに入学し、学ぶことが仕官の条件となり、安政4年（1857年）から諸役見習いとして出仕する前に学んだ。

【学習内容】

教科は、儒学を中心に行われた。明倫堂での学習内容として「明倫堂文庫」がある。著察齋での学習に利用されたのが主である。明倫堂教育の真の目的は、優れた先生のもとで人の道をわきまえる人（子供）を育てることにある。生徒は礼儀を守り、自分の志を堅く守り、「学規」に示されている「行」・「習」を等しく身につけなければならないこと。「学規」は、そのようなことを具体的にまとめて日常の学習目標と示している。

【正しくすること】

「礼」・・・感謝尊敬の気持ちを行動であらわす。

「姿勢」・・・学ぶときの姿勢、歩くときの姿勢、見たり聞いたりするときの姿勢を正しくする。不必要なものには、目・耳を向けない。

「言葉」・・・話すことは正確に伝え、聞くことは正しく理解する。

「容姿」・・・きちんとした服装と他人から見て不快になる行動はしない。

「飲食」・・・節度のある食事を心掛ける。外出の折にも節度ある行動をする。

「読書」・・・本を読むに当たっては、心を集中し、気をそらさない。

【気を付けること】

「整理整頓」、「長幼の序」など。

参考までに、同名称の藩校は、尾張藩・加賀藩・上田藩・新庄藩・小諸藩にあり、意味からして高鍋藩のような教育がなされたと考えられる。

石井十次は9歳で明倫堂跡にできた島田小学校に入る。15歳になると私塾・晩翠学舎に入った。晩翠学舎では明倫堂行習齋と同じく漢学を教えた。

十次はこの塾で明倫堂の教育に触れたのである。四書五経を素読から学んだことが十次の人格の基礎をつくったといえる。

参考資料・・・高鍋町史、高鍋藩校「明倫堂」高鍋町教育委員会編

（編集委員 生駒亮）

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【都農町】黒木 至美 河野 貞文

【都城市】山路 修矛

【西都市】橋口 登志郎 田爪 淑子

【門川町】宮ノ下 由美子

★ご寄付をいただきました（敬称略）

*一般

【滋賀県】奥村 須磨子

【福岡県】山崎 和彦

【西都市】本部ノリ子

★12/21～1/20 の資料館来館者

団体・グループ 0人

個人 大人5人 小中高生1人

計6人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により1月20日までのものとしています。

★3月号の通信発送作業

3月11日（木）9時から印刷・製本

12日（金）9時から印刷・製本

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1

後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-juujinokai@kijo.jp

●我々が橋田和実会長が西都市長に 返り咲き

吉田松陰の和歌「かくすれば かくなるもの」と知りながら 已むに已まれぬ 大和魂」の覚悟で立ち上がった選挙戦。

令和3年1月24日投票日。

わずか2か月間しかない中での立候補表明や組織化されていない市民の草の根運動を背景に見事に返り咲き当選。

石井十次の会の会長職を4年間務めている経験も今後、福祉行政に活かされていくはず。期待が膨らみます。

児嶋草次郎理事長と森さち子・友草孝一両副会長が早速、翌日当選祝いに駆けつけられました。



【左から、児嶋理事長、友草副会長、森副会長、橋田会長、橋田夫人】

●松下さおり氏が編集委員に

昨年9月から欠員状態の編集委員に宮崎市在住の松下さおり氏が加わりました。

これで欠員が解消されます。5名で力を合わせていきます。

★編集後記

「むつび」巻頭はみなこホーム管理者の丸目和代氏から玉稿をいただきました。ありがとうございました。

コロナは全国的にそして、我が宮崎県でも拡大状況です。感染の火種がまだ県下全域に残されている状況です。

強い危機感を持ちながらも叡智と努力でなんととしても終息(収束)に向かいたいものです。

※文責 竹之下